

青年期女子における高齢者および 認知症高齢者のイメージに関する研究

A Study of the Image Adolescent Women Have of Elderly People and Elderly
People with Dementia

阿部 洋子

ABE Yohko

要 約

埼玉県内にある私立 A 大学の女子学生 74 名（平均年齢 19.47 歳 SD=1.34）を対象に、高齢者および認知症高齢者に対する SD 法によるイメージ調査を、質問紙を用いて実施した。調査対象者は、老年心理学や介護保険制度についての授業を受講していない。

その結果、高齢者に対するポジティブイメージは、2つの系統があり、高齢者の知恵に関わる「役に立つ、賢い」、円熟に関わる「温かい」などであり、認知症高齢者に対するポジティブイメージは、プライドが高いであった。健康であるならば、穏やかで、優しく、柔らかく、広い心で謙った態度を若い世代に手本として示して欲しいという希望の現われであるように思われる。ネガティブイメージは、いずれも老化により喪失されていく身体的能力に関係する項目であった。しかし認知症高齢者のネガティブイメージは、40 項目中 24 項目に亘り、若者世代が認知症になったら、こうになってしまうのではないかと不安項目が選択されたと考えられる。

因子構造は高齢者および認知症高齢者、共に、5 因子が抽出され、評価、親和性、力量、活動性、円熟性と命名された。評価では、賢さ、正しさ、上品さなどが、親和性では、話しやすさ、親密さなどが抽出された。

フェイスシートとして、高齢者と老人という呼称の違いで、イメージされる年齢が異なるかを問うた結果、高齢者は 60 歳以上（98%以上）、老人は 70 歳以上（70%以上）であり、改めて呼称によるイメージ作りの大切さを感じた。会話は世間話でいど、あるいはお互いに話す/聞くと回答した者が 64%以上であった。その会話の程度と関係しているのが、両親の祖父母に対する世話の考え方であった。つまり、世話をするを当たり前と考えていたり、余裕があれば世話をすると考えていたりするが、若者世代が世間話でいど、あるいはお互いに話す/聞くというコミュニケーションの構築にプラスの効果を及ぼしていることが分かった。

目的

国立社会保障・人口問題研究所の『将来推計人口・世帯数』（2017 改訂版）によれば、高齢者の人口比率は、1980 年に、総人口の 9.1%（10,648,000 人）だったものが、2012 年に団塊の世代が前期高齢者になったことで 25%を超え、2022 年には彼らが後期高齢者になり、2040 年には高齢者人口比

率は、総人口の 35% (39,206,000 人) を超えると予測されている。そして同研究所の『日本の世帯数の将来推計』(2018)によれば、全世帯の内、世帯主が 65 歳以上の世帯が、2035 年には 2021 万世帯 (40.8%) になるとされている。政府は介護保険制度の見直しという立場から、在宅介護を進めようとしているが、その中には老老介護、認認世帯が混在している。更に、祖父母の介護を親世代ではなく、子ども世代、即ち孫が担うというヤングケアラーの問題が出てきている。

核家族化が進んでいる中で、高齢者との同居体験が少なく、地域社会での高齢者と接する機会も少なくなっている。その中で、そもそも高齢者とのように対応したらよいのか、認知症高齢者の言動にどのように対応したらよいのか、何の心の準備もないまま在宅介護が推し進められてしまうのではないだろうか。自助努力という名の下に、家庭の中は圧力釜状態に陥るかもしれない。

そこで、先ず次世代を担う、若者世代が、高齢者や認知症高齢者に対して、どのようなイメージを持っているかを知る必要があると考えた。イメージは高齢者への対応、適切な行動の基礎を成すものである。行動はイメージに依存するともいえる。高齢者といっても柴田 (2002) がいうように、人格や英知は知能の低下がない限り生涯発達していくとするならば、健康で生き生きとした生活を送っている人もいれば、介護・看護を要する人もいるのである。全く別個に調査研究する必要があるのだろうか。共通するイメージというものがあるのだろうか。そしてイメージ形成に与える要因についても、先行研究を踏まえた上で、検討を加えたい。

方法

1. 調査対象者および調査の実施方法

1) 調査期日

2018 年 10 月 16~30 日

2) 調査対象者

埼玉県内にある私立 A 大学 (通学制) の女子学生 1・2 年生、74 名 (18~29 歳、平均 19.47 歳 : SD=1.34) に対し、授業時間中に、質問紙を配付し、調査者が口頭で調査の説明および協力依頼を行った。その際、倫理的配慮として、調査への協力は任意であり、協力の無い場合も不利益を被らないこと (例えば成績には無関係であることなど)、回答は無記名であり、結果は統計的処理を行うため、個人の回答が特定されないことなどを伝えた。また質問文を読み、調査対象者が心理的負担を感じた場合は、直ちに調査用紙への回答を中断してよいこと。調査用紙の回収は授業時間終了時に、教室の前方の机の上に、ランダムに置いてもらうようにし、個人が特定できないよう配慮することも伝えた。更に、同一内容を、調査用紙の表紙にも明記した。以

上、質問紙への回答をもって、調査への同意を得たものとした。

2. 質問紙の構成

(1) SD 法によるイメージ測定尺度

選定された形容詞（形容語）対は、高齢者のイメージ測定として、保坂ら（1986）が用いた 15 項目、保坂ら（1988）が用いた 50 項目、中野ら（1994）が用いた 17 項目、大谷ら（1995）が用いた 15 項目などから、同一あるいは類似表現を除き、40 項目を選定した。いずれの研究も類似の形容詞対を選定しているにも関わらず、研究者により、因子構造が異なっているため、その構造を再確認するために、項目数が多いと思われたが、あえて 40 項目とした。

次に、認知症高齢者のイメージ測定については、木村ら（2013）、木村ら（2014）などがあるが、いずれも中野ら（1994）で用いた 17 項目を使用していたので、本調査でも、それに従うこととし、高齢者のイメージ測定に使用する形容詞対と同じ 40 項目を用いることにした。測定にあたっては、これら 40 項目について、高齢者イメージと認知症高齢者イメージをそれぞれ「どちらともいえない」を中間におき、両端に「非常にあてはまる」をおく 5 件法により回答を求めた。なお高齢者と認知症高齢者の形容詞対は、同一項目であるため、高齢者イメージを問うときは、右側にポジティブな形容詞を置き、認知症高齢者イメージを問うときは、左側にポジティブな形容詞を置き、方向性を統一した。集計の際に、ポジティブな形容詞に 5 点、ネガティブな形容詞に 1 点を配当した。

(2) フェイスシート

イメージを形成する要因として、滝川ら（1999）、竹田ら（2002）が個人的要因として上げた、祖父母との同居経験、会話内容、会話頻度などについて再検討するため、回答を求めた。

①年齢 ②学年

③年齢表現の問題：高齢者の年齢と老人の年齢を問うことで、表現の違いで、年齢に相違が出るかどうかを確認する。

④高齢者との話す機会：祖父母、祖父母以外、高齢者と話す機会が全く無い、について問うことで、どの程度、高齢者と関係性があるかを確認する。

⑤高齢者と話す頻度：対象は限定せず、高齢者と話す機会が、「よくある」、「時々ある」、「あまり無い」、「全く無い」を問うことで、どの程度、高齢者と関係性があるかを確認する。

⑥高齢者を世話した経験の有無：在宅介護、入院中の看病などを含め、世話をした経験を問う。世話をした期間ではなく、経験の有無を確認する。

⑦祖父母との同居の経験：現在同居中、過去に同居経験がある、同居経験なし、について問うことで、接触の機会があったかどうかを確認する。

⑧両親が祖父母との付き合いをどのように考えているか：いつも一緒に生活するのが良い、時々会うのが良い、たまに会話するのが良い、付き合わない方が良い、その他、親がどのように考えているか知らない、について問うことで、両親と祖父母との距離感について確認する。

⑨両親が祖父母の世話についてどのように考えているか：世話をするのが当たり前、自分に余裕があれば世話をする、無理をして世話をすることはない、その他、について問うことで、両親の祖父母の世話に対する意識を確認する。

結果

1. SD 法による「高齢者」および「認知症高齢者」イメージの平均得点 (Table 1)

(1) 高齢者のイメージ

健康であるかどうかは限定せず、「高齢者」のイメージを問い、評定平均値を算出した。「どちらでもない」を 3 点としたので、3.500 点を高得点、即ちポジティブイメージと判定した。その結果、「高齢者」イメージの平均得点で、ポジティブなイメージは 6 項目であった。最もポジティブだったのは「温かい」(Me.=3.892 点 SD=0.820) と「尊敬できる」(Me.=3.892 点 SD=0.786) であった。続いて「プライドが高い」(Me.=3.824 点 SD=0.912)、「明るい」(Me.=3.622 点 SD=0.961)、「役に立つ」(Me.=3.595 点 SD=0.720)、「賢い」(Me.=3.514 点 SD=0.880) であった。

一方、「高齢者」イメージの平均得点が、2.500 点未満を低得点とし、ネガティブイメージと判定した。その結果、「高齢者」イメージの平均得点で、ネガティブなイメージは 8 項目であった。最もネガティブだったのは「遅い」(Me.=1.838 点 SD=0.892) であった。続いて「頑固な」(Me.=2.095 点 SD=0.894)、「暇そう」(Me.=2.095 点 SD=0.982)、「鈍い」(Me.=2.122 点 SD=0.906)、「小さい」(Me.=2.135 点 SD=0.911)、「弱い」(Me.=2.324 点 SD=0.952)、「威張った」(Me.=2.419 点 SD=0.776)、「灰色の」(Me.=2.486 点 SD=0.895) であった。

(2) 認知症高齢者のイメージ

次に「認知症高齢者」のイメージを問い、評定平均値を算出した。「高齢者」イメージと同様に、3.500 点を高得点、即ちポジティブイメージと判定した。その結果、「認知症高齢者」イメージの平均得点で、ポジティブなイメージは「プライドが高い」(Me.=3.514 点 SD=1.024) の 1 項目のみであった。

一方、「高齢者」イメージと同様に、平均得点が 2.500 点未満を低得点とし、ネガティブイメージと判定した。その結果、「認知症高齢者」イメージの平均得点で、ネガティブなイメージは 24 項目であった。尺度が 40 項目あり、半数以上がネガティブイメージとして選定されることになった。最も

ネガティブだったのは「鈍い」(Me.=1.932点 SD=0.896)であった。続いて「病気がちな」(Me.=2.041点 SD=0.971)、「小さい」(Me.=2.081点 SD=0.824)、「遅い」(Me.=2.095点 SD=0.878)、「弱い」(Me.=2.135点 SD=1.089)、「邪魔する」(Me.=2.135点 SD=0.849)、「役に立たない」(Me.=2.162点 SD=0.844)、「話しにくい」(Me.=2.162点 SD=1.021)、「灰色の」(Me.=2.176点 SD=0.850)、「疎遠な」(Me.=2.203点 SD=0.860)、「劣った」(Me.=2.216点 SD=0.832)、「みじめな」(Me.=2.230点 SD=0.786)、「悲しい」(Me.=2.230点 SD=0.869)、「無能な」(Me.=2.243点 SD=0.791)、「頑固な」(Me.=2.270点 SD=1.126)、「だらしない」(Me.=2.270点 SD=0.746)、「ひどい」(Me.=2.284点 SD=0.712)、「暇そう」(Me.=2.297点 SD=1.069)、「低い」(Me.=2.338点 SD=0.848)、「醜い」(Me.=2.378点 SD=0.716)、「愚かな」(Me.=2.432点 SD=0.778)、「尊敬できない」(Me.=2.446点 SD=0.995)、「汚い」(Me.=2.446点 SD=0.779)であった。

一般的な「高齢者」と「認知症高齢者」の両方でポジティブイメージだったのは「プライドが高い」の1項目のみであった。一般的な「高齢者」と「認知症高齢者」の両方でネガティブイメージだったのは、一般的な「高齢者」の8項目中、7項目であった。なお残りの1項目は「威張った」であるが、「認知症高齢者」の評定平均値は、Me.=2.514点 (SD=0.910)であり、ネガティブイメージとして選定しても大きな問題はない得点であった。

2. SD法による「高齢者」および「認知症高齢者」イメージの差の検定 (Table 2)

「高齢者」イメージと「認知症高齢者」イメージの評定平均値についてt検定による差の検定を実施した。その結果、40項目中、有意差が見られなかったのは、「受動的 - 能動的」、「弱い - 強い」、「小さい - 大きい」、「遅い - 速い」、「鈍い - 鋭い」、「暇そう - 忙しそう」、「低い - 高い」、「保守的 - 進歩的」、「厳しい - 優しい」、「頑固な - 素直な」、「威張った - へりくだった」、「プライドが低い - プライドが高い」の12項目であった。残りの28項目は、すべて「高齢者」の方がポジティブに評価されていた。

3. 「高齢者」および「認知症高齢者」イメージの因子構造

(1) 「高齢者」イメージの因子構造 (Table 3)

主因子法、バリマックス回転を実施したところ、スクリー法により、5因子が抽出された。次に、因子負荷量0.5000以上の項目を採択した。その結果、第1因子(寄与率21.74%)は「汚い - きれい」、

「邪魔する - 手伝ってくれる」、「下品な - 上品な」、「愚かな - 賢い」、「正しくない - 正しい」の5項目であったため「評価」と命名した。次に、第2因子（寄与率9.68%）は「話しにくい - 話しやすい」、「役に立たない - 役に立つ」、「疎遠な - 親密な」、「尊敬出来ない - 尊敬できる」、「悲しい - 嬉しい」の5項目であったため「親和性」と命名した。次に、第3因子（寄与率6.43%）は「受動性 - 能動性」、「弱い - 強い」、「消極的 - 積極的」、「病気がち - 元気な」、「静的 - 動的」、「暗い - 明るい」の6項目であったため「力量」と命名した。次に、第4因子（寄与率4.33%）は「遅い - 速い」、「鈍い - 鋭い」、「暇そう - 忙しそう」の3項目であったため「活動性」と命名した。最後に、第5因子（寄与率3.85%）は「厳しい - 優しい」、「頑固な - 素直な」、「威張った - へりくだった」の3項目であったため「円熟性」と命名した。

(2) 「認知症高齢者」イメージの因子構造 (Table 4)

主因子法、バリマックス回転を実施したところ、スクリー法により、5因子が抽出された。次に、因子負荷量0.5000以上の項目を採択した。その結果、「高齢者」イメージの因子構造とは異なる構造が見出された。第1因子（寄与率20.04%）は「醜い - 美しい」、「愚かな - 賢い」、「好き - 嫌い」、「正しくない - 正しい」、「無能な - 有能な」、「だらしない - きちんとした」、「劣った - 優れた」、「ひどい - すばらしい」、「役に立たない - 役に立つ」、「下品な - 上品な」、「汚い - きれいな」、「尊敬できない - 尊敬できる」、「みじめな - さっそうとした」、「おもいやりが無い - 思いやりがある」、「邪魔する - 手伝ってくれる」の16項目であったため「評価」と命名した。次に、第2因子（寄与率12.13%）は「固い - 柔らかい」、「話しにくい - 話しやすい」、「暗い - 明るい」、「厳しい - 優しい」、「悲しい - 嬉しい」、「疎遠な - 親密な」、「冷たい - 温かい」、「病気がちな - 元気な」、「消極的 - 積極的」、「灰色の - バラ色の」の10項目であったため「親和性」と命名した。次に、第3因子（寄与率9.10%）は「小さい - 大きい」、「遅い - 速い」、「弱い - 強い」、「低い - 高い」、「鈍い - 鋭い」、「暇そう - 忙しそう」の6項目であったため「活動性」と命名した。次に、第4因子（寄与率6.32%）は「プライドが低い - プライドが高い」、「威張った - へりくだった」、「頑固な - 素直な」の3項目であったため「円熟性」と命名した。最後に、第5因子（寄与率5.03%）は「受動性 - 能動性」、「静的 - 動的」、「保守的 - 進歩的」の3項目であったため「力量」と命名した。

4. フェイスシート

(1) 女子大学生の「高齢者」と「老人」という呼称によりイメージされる年齢の違い

言葉によって対象物のイメージが変わることは知られている。そこで「高齢者」は何歳以上か、「老人」は何歳以上かを問うことで、老年心理学や介護保険制度についての授業を受講していない状態の

女子大学生が、どのようなイメージを持っているかを確認した。その結果、「高齢者」、「老人」とともに45歳以上と回答した者は0名だった。55歳以上と回答した者も共に1名(1.35%)だった。ところが60歳以上と回答した者は「高齢者」が26名(35.14%)、「老人」が9名(12.16%)。65歳以上と回答した者は「高齢者」が19名(25.68%)、「老人」が12名(16.22%)。70歳以上と回答した者は「高齢者」が17名(22.97%)、「老人」が23名(31.08%)。75歳以上と回答した者は「高齢者」が9名(12.16%)、「老人」が12名(16.22%)。80歳以上と回答した者は「高齢者」が2名(2.70%)、「老人」が17名(22.97%)であった。即ち、老年心理学や介護保険制度についての授業を受講していない状態の女子大学生においては、「高齢者」は60歳以上(98.65%)、「老人」は70歳以上(70.27%)とイメージしているという結果を得た。

(2) 女子大学生の高齢者と話す機会と、話す頻度

高齢者と話す機会は、その対象者は誰であるかとの問いに対して、「祖父母」だと回答した者が47名(63.51%)と最も多かった。次に「祖父母以外の高齢者」と回答した者が13名(17.57%)であり、高齢者と「全く話す機会が無い」と回答した者は14名(18.92%)であった。

更に、その頻度について、「よくある」と回答した者は17名(22.97%)、「時々ある」と回答した者は31名(41.89%)、「あまり無い」と回答した者は24名(32.43%)、「全く無い」と回答した者は2名(2.70%)であった。

次に、話し相手が誰かということと、会話の頻度についての関係を調べるために、クロス集計を実施した。その結果、「祖父母」とは「時々ある」と回答した者が24名(32.43%)と最も多かった。次に、「よくある」と回答した者が12名(16.22%)、「あまり無い」と回答した者が11名(14.86%)、「全く無い」と回答した者は0名であった。「祖父母以外」とは「よくある」と回答した者が5名(6.76%)、「時々ある」と回答した者が6名(8.11%)、「あまり無い」と回答した者が2名(2.70%)であった。更に、 χ^2 検定を実施したところ有意差が見出され、「祖父母とは、時々会話する」という関係性が見出された($\chi^2=20.3248, df=6, p<0.01$ Yatesの補正)。

(3) 女子大学生の高齢者との会話の程度と高齢者との続柄

高齢者と話す会話がどの程度かについて問うたところ、「挨拶でいど」だと回答した者が16名(21.62%)、「世間話でいど」だと回答した者が29名(39.19%)、「一方的に話す/聞く」と回答した者が11名(14.86%)、「お互いに話す/聞く」と回答した者が18名(24.32%)であった。

更に、その話し相手として、前述の祖父母との間で、どの程度の会話が交わされているかを調べるためにクロス集計を実施した。その結果、「挨拶でいど」と回答した者が6名(8.11%)、「世間話でいど」と回答した者が19名(25.68%)、「一方的に話す/聞く」と回答した者が7名(9.46%)、「お互いに話す/聞く」と回答した者が15名(20.27%)であり、「世間話でいど」あるいは「お互いに話す/

聞く」という関係性であるという結果を得た。そこで、「会話の程度」と「高齢者が誰であるか」との関係について検討するために χ^2 検定を実施した。その結果、有意差は見出され、「祖父母とは、世間話でいどの会話を交わす関係」（19名、25.68%）にあるか、あるいは「祖父母とは、お互いに話す/聞くていどの関係」（15名、20.27%）にあるという傾向が見出され、「祖父母以外の高齢者とは、世間話でいどの関係」にあるという傾向が見出された（ $\chi^2=11.4756, df=6, p<0.10$ Yatesの補正）。

（4）女子大学生の祖父母の世話をした経験の有無と同居経験の有無

祖父母の世話をした経験については、「ある」と回答した者が17名（22.97%）、「ない」と回答した者が57名（77.03%）であった。

また祖父母との同居の有無については、「現在同居中」と回答した者が9名（12.16%）、「過去に同居の経験がある」と回答した者が21名（28.38%）、「同居経験はない」と回答した者が44名（59.46%）であった。

祖父母の世話が、在宅介護であるか、入院中の看病であるか、ちょっとした風邪をひいた時の世話であるか、内容を問うていないが、世話の有無と同居経験の有無のクロス集計を実施した結果、「現在同居中」で世話をした経験がある」と回答した者が3名（4.05%）、「世話をした経験がない」と回答した者が6名（8.11%）であったが、これも世話の内容が在宅介護であるかどうかは分からない。しかし最も多い回答は、「世話をした経験がなく、これまでも同居した経験がない」という者で、37名（50.00%）と偏った結果を得た。そこで、「祖父母の世話をした経験の有無」と「同居経験の有無」の関係について検討するために χ^2 検定を実施した。その結果、有意差は見出されず、「同居経験の有無と世話の有無」の関係については、明確な関係性は見出されなかった（ $\chi^2=1.7467, df=2, n.s.$ Yatesの補正）。

（5）両親の祖父母との付き合い方と、世話に対する考え方

両親が祖父母とどのような付き合い方をしているか、あるいはしたいと考えているかについて問うたところ「いつも一緒に生活する」と回答した者が11名（14.86%）、「時々会う」と回答した者が46名（62.16%）、「たまに会話する」と回答した者が9名（12.16%）、「付き合わない方が良い」と回答した者が2名（2.70%）、「どう考えているか知らない」と回答した者が6名（8.11%）であり、「時々会う」というような付き合い方を「している」、あるいは「したい」と考えている両親が最も多いという結果を得た。

次に、両親が祖父母の世話について、どのように考えていると思うかについて問うたところ、「世話をするのは当たり前」と回答した者が33名（44.59%）、「自分に余裕があれば世話をする」と回答した者が25名（33.78%）、「無理して世話をすることはない」と回答した者が13名（17.57%）、「その他（どう考えているか知らない）」と回答した者が3名（4.05%）であり、「世話をするのは当たり前

前」だと考えている両親が最も多く、続いて「余裕があれば世話をする」と考えている両親が多いという結果を得た。

そこで、両親が祖父母とどのような付き合い方をしているか（したいと考えているか）と、世話についての考え方との関係について検討するためにクロス集計を実施した。その結果、「いつも一緒に生活する×世話をするのは当然」と回答した者は 9 名（12.16%）、「ときどき会う×世話をするのは当然」と回答した者は 20 名（27.03%）、「ときどき会う×自分に余裕があれば世話をする」と回答した者は 18 名（24.32%）であった。即ち、「ときどき会う」のが良いと考えている両親の中に、世話をするのは当然だと考えたり、余裕があれば世話をすると考えている者が多い（38 名、51.35%）という結果を得た。しかし、 χ^2 検定を実施したところ有意差は見出されず、「両親の祖父母に対する付き合い方と世話に対する考え方」の関係については、明確な関係は見出されなかった（ $\chi^2 = 15.5019, df = 12, n.s.$ Yates の補正）。なお、Yates の補正を行わなければ、 $\chi^2 = 30.3917, df = 12, p < 0.01$ となることから、調査対象者の数が多ければ、「世話をするのは当たり前」あるいは「自分に余裕があれば世話をする」と考えている両親は、祖父母と「ときどき会う」ようにしているという結果が得られたかもしれない。

（6）女子大学生の高齢者との会話の程度と、両親の祖父母との付き合い方および世話に対する考え方
前述の女子大学生の高齢者との会話の程度（挨拶でいど、世間話でいど、一方的に話す/聞く、お互いに話す/聞く）と、両親の祖父母との付き合い方、および両親の祖父母の世話についての考え方が、どのような関係になっているかについて検討するためにクロス集計を実施した。

その結果、「両親が祖父母との付き合い方として、ときどき会う」と回答し、「自分自身は祖父母と世間話でいどの会話を交わす」と回答した者は 22 名（29.73%）、「自分自身は祖父母と、お互いに話す/相談相手」と回答した者は 11 名（14.86%）であった。そこで、「両親の祖父母との付き合い方」と女子大学生の「祖父母との会話の程度」の関係について検討するために χ^2 検定を実施した。その結果、有意差は見出されず、「両親の祖父母との付き合い方」の影響が、女子大学生の「祖父母との会話の程度」とは、明確な関係は見出されなかった（ $\chi^2 = 2.9403, df = 12, n.s.$ Yates の補正）。

次に、両親が祖父母の世話に対してのどのように考えているかについて「世話をするのは当たり前」だと考えている場合、「自分自身は祖父母と世間話でいど」の話をすると回答した者 14 名（18.92%）、「お互いに話す/聞く」と回答した者は 10 名（13.51%）であった。また両親が「自分に余裕があれば世話をする」と考えている場合、「自分自身は祖父母と世間話でいど」の話をすると回答した者は 11 名（14.86%）であった。

そこで、「両親の祖父母の世話に対する考え方」と女子大学生の「祖父母との会話の程度」の関係について検討するために χ^2 検定を実施した。その結果、有意差は見出されず、「両親の祖父母の世話に対する考え方」の影響が、女子大学生の「祖父母との会話の程度」とは、明確な関係は見出されな

かった ($\chi^2=3.8796, df=9$, n.s. Yatesの補正)。

考察

1. SD法による「高齢者」および「認知症高齢者」イメージの平均得点

(1) 高齢者のイメージ

ポジティブイメージとして2つの系統があるように思われる。一つは「尊敬できる」、「役に立つ」、「賢い」という豊かな経験と、それに伴う知恵に対してであるように思われる。したがって「プライドが高い」ことも当然であり、許容されるということかもしれない。もう一つは、「温かく」「明るい」というイメージであり、これは孫育てから受ける穏やかさ、優しさと関係するものかもしれない。

一方、ネガティブイメージも2つの系統があるように思われる。一つは、「遅く、鈍く、小さく、弱く、灰色」というものである。これらは老化により喪失されていく、身体的能力と関係しているであろう。もう一つは、「頑固で、威張っていて、暇そうにしている」という、ステレオタイプ的なイメージが持たれているように思われるが、これらはポジティブイメージの「役立つ、賢い、プライドが高い」と表裏一体のイメージであるように思われる。即ち、高齢者の知恵を賢いものとして、尊敬し、役立つと感じてはいるものの、その知恵の内容を、必要だと判断する主体は、若者の方である。必要な内容だと感じたならば、受け入れるが、不要な内容だと感じたならば、高齢者は、社会の第一線から退いているにも関わらず、いつまでも昔の経験を盾に、助言や忠告をしたがる、お節介で厄介な人間だというイメージを持っているということなのではないだろうか。

(2) 認知症高齢者のイメージ

ポジティブイメージは、「プライドが高い」(Me.=3.514点 SD=1.024)のみであった。そして「高齢者」でポジティブイメージであった知恵に関連する「役に立つ」(Me.=3.595点 SD=0.720)は「役に立たない」(Me.=2.162点 SD=0.844)に、「賢い」(Me.=3.514点 SD=0.880)は「愚かな」(Me.=2.432点 SD=0.778)に逆転している。一方、穏やかさに関連する「温かい」(Me.=3.892点 SD=0.820)、「明るい」(Me.=3.622点 SD=0.961)は、ネガティブイメージとまではならないようである。これは前述したように、認知症を発症した後も、それ以前の孫育ての段階で、「温かい」「明るい」高齢者でいたことが、良好なイメージを保つことに繋がるといえるのではないだろうか。

ネガティブイメージは、イメージ尺度40項目中、24項目であった。老年心理学、介護保険制度などについての知識を持たない段階の女子大学生においては、認知症高齢者とは、邪魔をする人、認知能力の低下に伴い、汚く、醜い、ひどい、だらしない、無能な、劣った存在とイメージとされている

ようである。また「話しにくい」(Me.=2.162点 SD=1.021)は、認知症高齢者とはコミュニケーションを交わすことが困難になるに違いないというイメージを持っているということではないだろうか。このようなイメージを持った状態で在宅介護をすることになれば、それは認知症患者にとっても、ケアラーである家族にとっても不幸な事態が待ち受けているように思われる。

そして、こうしたネガティブイメージは、若者世代にとって、認知症になれば、自分自身も、このようになってしまうのではないかという不安の表れであるように思われる。

2. SD法による「高齢者」および「認知症高齢者」イメージの差の検定

「高齢者」イメージと「認知症高齢者」イメージの平均得点についてt検定による差の検定を実施した。その結果、40項目中、有意差が見られなかった項目を、因子分析の結果(因子負荷量が0.5000未満の項目も含める)と組み合わせてみると、力量の3項目(受動性、弱い、小さい)、活動性の5項目(遅い、鈍い、暇そう、低い、保守的)、円熟性の4項目(厳しい、頑固な、威張った、プライドが高い)である。

健康で生き生きと生活している高齢者からすれば、老化現象に関連して起きる機能低下や喪失が、ステレオタイプ的に捉えられているとの反論もあろう。しかし、「円熟性」の部分を見落としてはいけない。健康であるならば、穏やかで、優しく、柔らかく、広い心で、謙った態度を示すことが、若い世代にとって、何十年か先の、将来の自分たちの手本となるということではないだろうか。ステレオタイプと一蹴せず、高齢者自身も、円熟性について再考する必要があるのではないだろうか。

その一方で、認知症高齢者とその家族介護者(ケアラー)の問題がある。上述のようなネガティブイメージが形成されているということは、若者世代にとって、認知症を患っているかどうかは別にして、そもそも高齢者になるということを、不安に感じているということであろう。そう考えると、若い年齢のうちから、認知症や介護保険などについての適切な情報提供がなされる必要があると思われる。

3. 「高齢者」および「認知症高齢者」イメージの因子構造

先行研究では、研究者によって、様々な因子が命名されている。それぞれの調査目的によって異なる結果が導き出されるのは当然であろう。そこで、今回の調査では、オズグッドの3つの基本因子に出来るだけ近づけて構造を解釈したいと考えた。スクリー法により、「高齢者」イメージも「認知症高齢者」イメージも5因子が抽出された。そこで「評価」「力量」「活動」を軸とし、残りの2因子は、先行研究を参考にして「親和性」と「円熟性」と命名した。

高齢者と認知症高齢者のイメージの因子構造は異なっているが、因子ごとの内容は共通する部分が多い。「高齢者」の因子構造は、第1因子「評価」、第2因子「親和性」、第3因子「力量」、第4因子「活動性」、第5因子「円熟性」であり、「認知症高齢者」の因子構造は、第1因子「評価」、第2因子「親和性」、第3因子「活動性」、第4因子「円熟性」、第5因子「力量」であった。

「高齢者」イメージの第1因子「評価」は5項目で、「認知症高齢者」イメージの第1因子「評価」の項目は16項目であった。2つのイメージの因子寄与率に大きな差はみられなかったが、項目数に大きな違いがみられた。なお「高齢者」イメージの5項目は、「認知症高齢者」イメージにすべて含まれており、認知症であるかどうかは別にして、高齢者イメージを語る上で、きれいな、手伝ってくれる、上品な、賢い、正しいなど「知恵」に関する項目は、重要であるように思われる。

高齢者のポジティブイメージの中核をなす「知恵」が、認知症高齢者においては、発揮することが出来なくなるとイメージされることによって、「知恵」に関する項目がネガティブイメージになってしまうようである。そのことにより、愚かな、正しくない、役に立たない、下品な、汚い、邪魔する存在とイメージされるようになるばかりでなく、高齢者のイメージにはみられない、醜い、嫌い、悪い、無能な、だらしのない、劣った、ひどい、尊敬できない、みじめな、思いやりのないなどのイメージを引き寄せるようである。

また「高齢者」イメージの第2因子「親和性」は5項目で、「認知症高齢者」イメージの第2因子「評価」の項目は10項目であった。2つのイメージの因子寄与率に大きな差はみられなかったが、項目数に大きな違いがみられた。なお「高齢者」イメージの5項目の内3項目が、「認知症高齢者」イメージに含まれており、認知症であるかどうかは別にして、高齢者のイメージを語る上で、話しやすい、嬉しさ・喜び、親密さなどが、重要な要素であるように思われる。

次に「高齢者」イメージの第3因子は「力量」であり、「受動的で、静的で、弱い、明るい」イメージであったが、「認知症高齢者」イメージでは「力量」は第5因子であり、「能動的で、動的な」イメージであった。「高齢者」は静的なイメージで、「認知症高齢者」は動的なイメージであった。即ち、「高齢者」は、身体的には衰え、社会的には第一線から退いているなどから受動的で、静的なイメージが形成されているが、「認知症高齢者」は徘徊する、暴言・暴力といったイメージから能動的で、動的なイメージが形成されているのではないだろうか。こうした周辺症状に対する適切な情報を持っていないことが、在宅介護をする際、不安を生じさせることに繋がるように思われる。

次に「高齢者」イメージの第4因子は「活動性」であったが、「認知症高齢者」イメージでは「活動性」は第3因子であった。「高齢者」イメージも、「認知症高齢者」イメージも、共に「遅く、鈍く、暇そう」であった。活動性のイメージは、身体的な衰えと関係しており、元気な高齢者の方も多いが、若い女子大学生からみれば、やはり活動性が落ちていると感じるのはやむを得ないように思われる。

最後に「高齢者」イメージの第5因子は「円熟性」であり「優しく、柔らかいが、プライドが高く、頑固で、威張った」イメージであったが、「認知症高齢者」イメージでは「円熟性」は第4因子であ

り「優しいが、プライドが高く、頑固で、威張った」イメージであった。円熟性については、「高齢者」イメージも、「認知症高齢者」イメージでも、共に「優しいが、プライドが高く、頑固で、威張っている」というイメージが形成されているようである。齢を重ねることで円熟さを増すというイメージを、持たれていない状況にあるということを、高齢者は知る必要があるのかもしれない。「高齢者」においては「柔らかない」イメージがみられるが、因子負荷量が大きいとはいえないという問題はある。むしろ「認知症高齢者」イメージでは「固い-柔らかない」で「親和性」で高い因子負荷量を示している。即ち、「認知症高齢者」は、優しいかもしれないが、固くて、心の中に入っていきそうもないという女子大学生の不安な気持ちと強く結びついているのではないだろうか。

4. フェイスシート

(1) 高齢者と老人という呼称でイメージされる年齢の違い

言葉によってイメージが変わることは知られている。そこで「高齢者」は何歳以上か、「老人」は何歳以上かを問うことで、老年心理学や介護保険制度についての授業を受講していない状態の女子大学生が、どのようなイメージを持っているかを知ることが目的として調査を実施した。その結果、「高齢者」は60歳以上(98.65%)、「老人」は70歳以上(70.27%)と判断していることが分かった。呼称による違いで、10歳の開きが出るということを改めて実感できる結果だと思われる。

「老人」と呼ばれることは、年寄り扱いされたと感じるなどという理由から、「高齢者」という呼称が定着してきたように思われる。しかしその一方で、「高齢者」と呼ばれる年齢が10歳ほど下がり、高齢者の年齢の幅が広がったといえるようである。

(2) 高齢者と話す機会、頻度、程度

高齢者と話す機会は、その対象者が「祖父母」だと回答した者が47名(63.51%)と最も多かった。そして高齢者と「全く話す機会が無い」と回答した者も14名(18.92%)である。更に、その頻度について、「よくある」と「時々ある」と回答した者で、48名(64.86%)なる。核家族化が進み、高齢者と自然と会話をする機会が減少することで、若い世代は、何を話せばよいのか分からず、これで在宅介護が進行すれば、介護される側もする側も、閉塞感を抱えることが懸念されよう。

また、同居することになれば、会話を「挨拶でいど」で済ませる訳にもいかないだろう。「世間話でいど」も毎日のことになれば、ネタ切れということになるだろう。「一方的に話す/聞く」ことも疲れるだろう。しかし、祖父母と「ときどき会う」と回答した者の中には、「お互いに話す/聞く」と回答した者が11名(14.86%)と多い。在宅介護をすれば、毎日、顔を合わせることになるだろう。その時になって、何を話せばよいのか分からないということになれば、ケアする側もされる側も精神的

に大きな負担となってしまう。在宅介護という状況になる以前より、「ときどき会っている」ことが大切になると思われる。

(3) 女子大学生の高齢者との会話の程度と、両親の祖父母の世話についての考え方

女子大学生が、祖父母に対して行っている会話の程度（挨拶ていど、世間話ていど、一方的に話す/聞く、お互いに話す/聞く）と、両親の祖父母の世話についての考え方とが、どのような関係になっているかについてクロス集計を行った結果、両親が祖父母の「世話をするのは当たり前」だと考えている場合、「世間話ていど」の話をする子ども世代は14名（18.92%）、「お互いに話す/聞く」子ども世代は10名（13.51%）であった。また両親が「自分に余裕があれば世話をする」と考えている場合、「世間話ていど」の話をする子ども世代は11名（14.86%）であった。 χ^2 検定の結果、有意な偏りはみられなかったものの、両親の祖父母の世話に対する考え方が、祖父母と孫世代の関係性構築に影響を及ぼす傾向があるように思われる。

Table 1 高齢者イメージと認知症高齢者イメージの平均得点のソート（降順）およびt検定の結果

質問項目	高齢者のイメージ		t検定の結果 (df=73)		質問項目		認知症高齢者のイメージ		t検定の結果 (df=73)	
	平均得点	標準偏差	t値	p値	質問項目	平均得点	標準偏差	t値	p値	
Q2-14 冷たい	3.892	0.820	5.8034	p < 0.001	Q3-33 プライドが高い	3.514	1.024	1.9599	n.s.	
Q2-25 尊敬できない	3.892	0.786	11.7158	p < 0.001	Q3-18 静的	3.230	1.105	3.9572	p < 0.001	
Q2-33 プライドが低い	3.824	0.912	1.9599	n.s.	Q3-14 冷たい	3.095	0.847	5.8034	p < 0.001	
Q2-29 暗い	3.622	0.961	6.8667	p < 0.001	Q3-20 受動的	3.000	1.228	0.5119	n.s.	
Q2-26 役に立たない	3.595	0.720	12.2253	p < 0.001	Q3-31 厳しい	2.846	0.858	1.1361	n.s.	
Q2-4 愚かな	3.514	0.880	8.8008	p < 0.001	Q3-28 消極的	2.938	1.007	4.4313	p < 0.001	
Q2-30 上品な	3.473	0.879	6.5274	p < 0.001	Q3-38 貪欲な	2.757	1.018	2.2430	p < 0.05	
Q2-32 思いやりにない	3.446	0.938	5.7940	p < 0.001	Q3-32 思いやりにない	2.743	0.812	5.7940	p < 0.001	
Q2-6 だらしない	3.378	0.947	8.5313	p < 0.001	Q3-29 暗い	2.730	1.076	6.8667	p < 0.001	
Q2-19 貧しい	3.378	0.902	5.7767	p < 0.001	Q3-40 固い	2.703	0.975	3.6401	p < 0.001	
Q2-22 嫌いな	3.378	0.855	8.3004	p < 0.001	Q3-19 貧しい	2.662	0.727	5.7767	p < 0.001	
Q2-28 消極的	3.378	1.082	4.4313	p < 0.001	Q3-30 上品な	2.662	0.763	6.5274	p < 0.001	
Q2-21 無能な	3.351	0.711	10.4163	p < 0.001	Q3-7 正しくない	2.608	0.755	5.9278	p < 0.001	
Q2-5 悪い	3.270	0.782	6.5722	p < 0.001	Q3-5 悪い	2.514	0.667	6.5722	p < 0.001	
Q2-7 正しくない	3.230	0.837	5.9278	p < 0.001	Q3-22 嫌いな	2.514	0.880	8.3004	p < 0.001	
Q2-13 話しにくい	3.203	1.110	7.0741	p < 0.001	Q3-35 保守的	2.514	0.763	0.0000	n.s.	
Q2-40 固い	3.189	1.081	3.6401	p < 0.001	Q3-36 威張った	2.514	0.910	0.8806	n.s.	
Q2-1 ひどい	3.162	0.683	8.4840	p < 0.001	Q3-3 汚い	2.446	0.779	3.9055	p < 0.001	
Q2-12 邪魔する	3.162	0.922	8.5499	p < 0.001	Q3-25 尊敬できない	2.446	0.995	11.7158	p < 0.001	
Q2-15 悲しい	3.149	0.975	7.3036	p < 0.001	Q3-4 愚かな	2.432	0.778	8.8008	p < 0.001	
Q2-27 みじめな	3.122	0.596	8.9929	p < 0.001	Q3-2 醜い	2.378	0.716	6.7517	p < 0.001	
Q2-31 厳しい	3.108	1.142	1.1361	n.s.	Q3-23 低い	2.338	0.848	1.7201	n.s.	
Q2-24 劣った	3.095	0.924	6.8087	p < 0.001	Q3-10 軽(ひま)そう	2.297	1.069	1.2777	n.s.	
Q2-38 貪欲な	3.095	0.924	2.430	p < 0.05	Q3-1 ひどい	2.284	0.712	8.4840	p < 0.001	
Q2-39 疎遠な	3.095	1.062	7.3689	p < 0.001	Q3-6 だらしない	2.270	0.746	8.5313	p < 0.001	
Q2-2 醜い	2.959	0.650	6.7517	p < 0.001	Q3-34 頑固な	2.270	1.126	1.1208	n.s.	
Q2-20 受動的	2.919	1.070	5.5119	n.s.	Q3-21 無能な	2.243	0.791	10.4163	p < 0.001	
Q2-3 汚い	2.811	0.734	3.9055	p < 0.001	Q3-15 悲しい	2.230	0.869	7.3036	p < 0.001	
Q2-18 静的	2.541	1.023	3.9572	p < 0.001	Q3-27 みじめな	2.210	0.786	8.9929	p < 0.001	
Q2-16 病気がちな	2.527	1.010	3.3713	p < 0.01	Q3-24 劣った	2.210	0.832	6.8087	p < 0.001	
Q2-23 低い	2.527	0.848	1.201	n.s.	Q3-39 疎遠な	2.203	0.860	7.3689	p < 0.001	
Q2-35 保守的	2.514	0.895	3.0000	n.s.	Q3-37 灰色の	2.176	0.850	3.3024	p < 0.01	
Q2-37 灰色の	2.466	0.895	3.3024	p < 0.01	Q3-13 話しにくい	2.162	1.021	7.0741	p < 0.001	
Q2-36 威張った	2.419	0.776	0.8806	n.s.	Q3-26 役に立たない	2.162	0.844	12.2253	p < 0.001	
Q2-17 弱い	2.324	0.952	1.3950	n.s.	Q3-12 邪魔する	2.135	0.849	8.5499	p < 0.001	
Q2-9 鈍い	2.135	0.911	0.4147	n.s.	Q3-17 弱い	2.135	1.089	1.3950	n.s.	
Q2-10 暗(ひま)そう	2.122	0.906	1.2728	n.s.	Q3-8 遅い	2.095	0.878	1.6939	n.s.	
Q2-34 頑固な	2.095	0.884	1.2177	n.s.	Q3-11 小さい	2.081	0.824	0.4147	n.s.	
Q2-8 遅い	1.838	0.892	1.6939	n.s.	Q3-16 病気がちな	2.041	0.971	3.3713	p < 0.01	
					Q3-9 鈍い	1.932	0.896	1.2728	n.s.	

Table2 高齢者イメージと認知症高齢者イメージの平均得点の差 (t検定)

質問項目	高齢者のイメージ		認知症高齢者のイメージ		t検定の結果 (df=73)	
	平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差	t値	p値
Q2-1 ひどい	3.162	0.683	2.284	0.712	8.4840	p < 0.001
Q2-2 醜い	2.959	0.650	2.378	0.716	6.7517	p < 0.001
Q2-3 汚い	2.811	0.734	2.446	0.779	3.9055	p < 0.001
Q2-4 愚かな	3.514	0.880	2.432	0.778	8.8008	p < 0.001
Q2-5 悪い	3.270	0.782	2.514	0.667	6.5722	p < 0.001
Q2-6 だらしない	3.378	0.947	2.270	0.746	8.5313	p < 0.001
Q2-7 正しくない	3.230	0.837	2.608	0.755	5.9278	p < 0.001
Q2-8 遅い	1.838	0.892	2.095	0.878	1.6939	n. s.
Q2-9 鈍い	2.122	0.906	1.932	0.896	1.2728	n. s.
Q2-10 暇(ひま)そう	2.095	0.982	2.297	1.069	1.2777	n. s.
Q2-11 小さい	2.135	0.911	2.081	0.824	0.4147	n. s.
Q2-12 邪魔する	3.162	0.922	2.135	0.849	8.5499	p < 0.001
Q2-13 話しにくい	3.203	1.110	2.162	1.021	7.0741	p < 0.001
Q2-14 冷たい	3.892	0.820	3.095	0.847	5.8034	p < 0.001
Q2-15 悲しい	3.149	0.975	2.230	0.869	7.3036	p < 0.001
Q2-16 病気がちな	2.527	1.010	2.041	0.971	3.3713	p < 0.01
Q2-17 弱い	2.324	0.952	2.135	1.089	1.3950	n. s.
Q2-18 静的	2.541	1.023	3.230	1.105	3.9572	p < 0.001
Q2-19 貧しい	3.378	0.902	2.662	0.727	5.7767	p < 0.001
Q2-20 受動的	2.919	1.070	3.000	1.228	0.5119	n. s.
Q2-21 無能な	3.351	0.711	2.243	0.791	10.4163	p < 0.001
Q2-22 嫌い	3.378	0.855	2.514	0.880	8.3004	p < 0.001
Q2-23 低い	2.527	0.848	2.338	0.848	1.7201	n. s.
Q2-24 劣った	3.095	0.924	2.216	0.832	6.8087	p < 0.001
Q2-25 尊敬できない	3.892	0.786	2.446	0.995	11.7158	p < 0.001
Q2-26 役に立たない	3.595	0.720	2.162	0.844	12.2253	p < 0.001
Q2-27 みじめな	3.122	0.596	2.230	0.786	8.9929	p < 0.001
Q2-28 消極的	3.378	1.082	2.838	1.007	4.4313	p < 0.001
Q2-29 暗い	3.622	0.961	2.730	1.076	6.8667	p < 0.001
Q2-30 下品な	3.473	0.879	2.662	0.763	6.5274	p < 0.001
Q2-31 厳しい	3.108	1.142	2.946	0.858	1.1361	n. s.
Q2-32 思いやりのない	3.446	0.938	2.743	0.812	5.7940	p < 0.001
Q2-33 プライドが低い	3.824	0.912	3.514	1.024	1.9599	n. s.
Q2-34 頑固な	2.095	0.894	2.270	1.126	1.1208	n. s.
Q2-35 保守的	2.514	0.895	2.514	0.763	0.0000	n. s.
Q2-36 威張った	2.419	0.776	2.514	0.910	0.8806	n. s.
Q2-37 灰色の	2.486	0.895	2.176	0.850	3.3024	p < 0.01
Q2-38 貧欲な	3.095	0.924	2.757	1.018	2.2430	p < 0.05
Q2-39 疎遠な	3.095	1.062	2.203	0.860	7.3689	p < 0.001
Q2-40 固い	3.189	1.081	2.703	0.975	3.6401	p < 0.001

Table 3 高齢者イメージの因子分析（主因子法、バリマックス回転）

質問項目	第1因子：評価	第2因子：親和性	第3因子：力量	第4因子：活動性	第5因子：円熟性	共通性	平均得点	標準偏差
Q2-3 汚い	0.6143	-0.1077	0.1942	0.4241	0.2257	0.8177	2.811	0.734
Q2-12 邪魔する	0.5869	0.2485	0.1722	0.1841	0.1543	0.7028	3.162	0.922
Q2-30 上品な	0.5859	0.1716	-0.0589	0.1236	0.1121	0.7006	3.473	0.879
Q2-4 愚かな	0.5149	0.4557	-0.0203	0.1450	0.0596	0.7312	3.514	0.890
Q2-7 正しくない	0.5145	0.1413	-0.1695	-0.0053	0.1844	0.7581	3.230	0.837
Q2-5 悪い	0.4963	0.1177	-0.1249	-0.3494	0.1684	0.7684	3.270	0.782
Q2-1 ひどい	0.4924	0.2067	0.0167	0.2522	0.4115	0.7959	3.162	0.683
Q2-27 みじめな	0.4903	0.1513	0.2030	-0.0259	0.0444	0.7044	3.122	0.596
Q2-21 無能な	0.4846	0.4673	0.1809	-0.0734	-0.0269	0.7235	3.351	0.711
Q2-2 醜い	0.4811	0.0742	0.2561	0.3912	0.2296	0.7292	2.959	0.650
Q2-24 劣った	0.4731	0.3922	0.0606	0.2997	-0.1959	0.7196	3.095	0.924
Q2-32 思いやりがない	0.4405	0.3467	0.0658	-0.0405	0.2549	0.7098	3.446	0.938
Q2-6 だらしない	0.3546	0.0008	0.0197	-0.0461	-0.0066	0.5689	3.378	0.947
Q2-13 話しにくい	-0.0577	0.7352	0.0329	0.0574	0.2284	0.8419	3.203	1.110
Q2-26 役に立たない	0.2974	0.7031	0.0814	0.0248	-0.0465	0.7204	3.595	0.720
Q2-39 疎遠な	0.2072	0.6254	0.2214	-0.0298	0.2366	0.7619	3.095	1.082
Q2-25 尊敬できない	0.2560	0.5817	-0.1358	0.2543	0.1712	0.5837	3.892	0.786
Q2-15 悲しい	0.3379	0.5163	0.1667	-0.0465	0.1054	0.7225	3.149	0.975
Q2-14 冷たい	0.2560	0.4985	-0.1173	-0.4671	0.2001	0.7769	3.892	0.820
Q2-22 嫌い	0.4522	0.4813	0.2394	-0.0095	0.3178	0.7310	3.378	0.855
Q2-20 受動的	0.1021	-0.0239	0.6751	0.1447	-0.0536	0.7662	2.919	1.070
Q2-17 弱い	0.1392	0.0672	0.6737	-0.0060	0.0451	0.8043	2.324	0.952
Q2-28 消極的	-0.1723	0.2036	0.6491	0.0981	0.0897	0.8052	3.378	1.082
Q2-16 病気がちな	0.1589	0.0096	0.6036	0.1713	0.1522	0.7249	2.527	1.010
Q2-18 静的	-0.1157	0.0937	0.5721	0.1666	-0.0913	0.8103	2.541	1.023
Q2-29 暗い	0.0897	0.3989	0.5165	0.1776	0.0606	0.7947	3.622	0.961
Q2-37 灰色の	0.3000	0.0880	0.4855	0.0070	0.3665	0.6573	2.486	0.895
Q2-38 無欲な	0.0485	0.1532	-0.4698	0.0430	-0.2051	0.6807	3.095	0.924
Q2-11 小さい	0.2725	0.2563	0.4016	0.2212	-0.0083	0.7441	2.135	0.911
Q2-8 遅い	0.1352	0.0430	0.1437	0.8354	0.0040	0.8743	1.838	0.892
Q2-9 鈍い	0.2856	0.1061	0.1604	0.7486	-0.0866	0.7925	2.122	0.906
Q2-10 暇（ひま）そう	-0.0321	0.0973	0.3970	0.5859	-0.0163	0.7657	2.095	0.982
Q2-23 低い	0.3454	0.1063	0.3349	0.4227	-0.3005	0.7671	2.527	0.848
Q2-35 保守的	-0.2234	0.2392	0.2255	0.3318	0.2383	0.6717	2.514	0.895
Q2-19 貧しい	0.1490	0.2545	0.0757	-0.3160	0.0066	0.5731	3.378	0.902
Q2-31 厳しい	0.1556	0.2266	0.2262	-0.1437	0.6285	0.7110	3.108	1.142
Q2-34 頑固な	0.1773	0.0496	0.0663	0.0271	0.5795	0.6843	2.095	0.894
Q2-36 威張った	0.2920	0.0667	0.0325	-0.0692	0.5597	0.6263	2.419	0.776
Q2-40 固い	-0.0654	0.3987	0.2381	-0.1576	0.4491	0.6537	3.189	1.081
Q2-33 フライドが低い	0.1356	-0.2654	0.1611	-0.1775	-0.3881	0.6584	3.824	0.912
固年値	8.6941	3.8711	2.5716	1.7312	1.5410			
寄与率	21.74%	9.68%	6.43%	4.33%	3.85%			
累積寄与率	21.74%	31.41%	37.84%	42.17%	46.02%			

Table 4 認知症高齢者イメージの因子分析（主因子法、バリマックス回転）

質問項目	第1因子：評価	第2因子：親和性	第3因子：力量	第4因子：円熟性	第5因子：活動性	共通性	平均得点	標準偏差
Q3-2 醜い	0.8121	0.0765	0.2721	0.2315	-0.0868	0.9006	2.378	0.716
Q3-4 愚かな	0.7632	0.1870	-0.0502	-0.0521	0.1080	0.8645	2.432	0.778
Q3-22 嫌い	0.7908	0.2574	0.0281	0.1855	0.1080	0.8573	2.514	0.880
Q3-5 悪い	0.7456	-0.0611	-0.0768	0.0990	0.1475	0.7883	2.514	0.667
Q3-7 正しくない	0.7223	0.1162	0.1162	0.0433	-0.1222	0.7757	2.608	0.755
Q3-21 無能な	0.7009	0.2513	0.2498	0.0570	0.2385	0.8657	2.243	0.791
Q3-6 だらしない	0.6818	0.0158	0.2796	0.0407	-0.0074	0.8163	2.270	0.746
Q3-24 劣った	0.6665	0.4758	0.2471	-0.1015	0.1585	0.8828	2.216	0.832
Q3-1 ひどい	0.6436	0.1233	-0.0398	0.3087	0.0244	0.7682	2.284	0.712
Q3-26 役に立たない	0.6255	0.4897	0.1392	0.0305	0.1652	0.8324	2.162	0.844
Q3-30 下品な	0.6149	0.2184	0.0357	0.3527	-0.1627	0.7609	2.662	0.763
Q3-3 汚い	0.6110	0.1721	0.2380	0.4248	-0.2348	0.8599	2.446	0.779
Q3-25 尊敬できない	0.5941	0.4289	-0.1137	-0.0048	0.0726	0.7465	2.446	0.995
Q3-27 みじめな	0.5906	0.3447	0.1771	0.1888	-0.0428	0.7725	2.230	0.786
Q3-32 思いやりがない	0.5341	0.4785	0.0133	0.3260	-0.2845	0.8415	2.743	0.812
Q3-12 邪魔する	0.5297	0.4939	-0.0705	0.0166	0.0928	0.7242	2.135	0.849
Q3-40 固い	0.0983	0.6449	0.1652	0.2120	-0.2472	0.7704	2.703	0.975
Q3-13 話しにくい	0.3410	0.6012	0.0933	0.0213	-0.0330	0.6937	2.162	1.021
Q3-29 暗い	0.2182	0.5790	0.3051	0.0520	0.0253	0.7658	2.730	1.076
Q3-15 悲しい	0.3258	0.5617	-0.0268	0.2408	-0.1186	0.8043	2.230	0.869
Q3-39 疎遠な	0.2772	0.5508	0.2528	0.0594	-0.0361	0.7773	2.203	0.860
Q3-14 冷たい	0.1361	0.5309	-0.0990	0.2384	0.0169	0.6284	3.095	0.847
Q3-16 病気がちな	0.0081	0.4798	0.4547	0.1914	0.1049	0.7765	2.041	0.971
Q3-28 消極的	0.0711	0.4678	0.2823	-0.2413	0.3167	0.8085	2.838	1.007
Q3-37 灰色の	0.2391	0.4581	0.2270	0.3061	0.2258	0.7509	2.176	0.850
Q3-11 小さい	-0.0858	0.0695	0.8541	0.0391	0.1179	0.8119	2.081	0.824
Q3-8 遅い	0.2149	-0.0605	0.6499	0.0959	0.2084	0.7279	2.095	0.878
Q3-17 弱い	0.0261	0.3028	0.6201	-0.1780	0.2107	0.7366	2.095	1.089
Q3-23 低い	0.3398	0.0740	0.5349	0.0155	-0.0963	0.6882	2.338	0.848
Q3-9 鈍い	0.1183	0.1734	0.5347	-0.0298	0.2140	0.7168	1.932	0.896
Q3-10 暗(ひま)そう	0.2716	-0.0279	0.4721	-0.2107	0.3097	0.7704	2.297	1.069
Q3-38 貪欲な	0.1786	-0.2792	-0.3067	0.2430	-0.0730	0.6981	2.757	1.018
Q3-33 プライドが低い	-0.1814	-0.0298	0.1602	-0.6110	0.2234	0.7018	3.514	1.024
Q3-31 厳しい	0.0166	0.5701	-0.1609	0.5742	-0.0122	0.8485	2.946	0.858
Q3-36 威張った	0.0964	0.2296	0.0529	0.5971	0.2159	0.6944	2.514	0.910
Q3-34 頑固な	0.2664	0.1795	0.0690	0.4488	0.0160	0.5987	2.270	1.126
Q3-20 受動的	0.0082	-0.0210	0.1470	-0.2547	0.5830	0.6476	3.000	1.228
Q3-18 静的	-0.2239	-0.1120	0.3633	-0.1153	0.5671	0.7292	3.230	1.105
Q3-35 保守的	0.0713	-0.0583	0.0877	0.1286	0.5383	0.5748	2.514	0.763
Q3-19 貧しい	0.1091	0.1277	0.1557	0.1037	0.3318	0.4328	2.862	0.727
固有値	8.0155	4.8523	3.6380	2.5287	2.0129			
寄与率	20.04%	12.13%	9.10%	6.32%	5.03%			
累積寄与率	20.04%	32.17%	41.26%	47.59%	52.62%			

引用文献

- 保坂久美子,袖井孝子(1986). 大学生の老人観. 老年社会科学, **8**, 103-106. 川島書店
- 保坂久美子,袖井孝子(1988). 大学生の老人イメージ. 社会老年学, **27**, 22-33.
- 木村典子,石川幸生,青木葵.(2013). 大学生の抱く認知症高齢者のイメージの関連要因. 愛知東邦大学 東邦学誌, **42**, 1, 75-87.
- 木村典子,石川幸生,青木葵.(2014). 認知症啓発教育が大学生の認知症高齢者のイメージに及ぼす効果. 愛知東邦大学 東邦学誌 **43**, 1, 141-151.
- 国立社会保障・人口問題研究所(2017改訂版). 日本の将来推計人口・世帯数.
- 国立社会保障・人口問題研究所(2018). 日本の世帯数の将来推計(全国推計).
- 中野いく子,冷水豊,中谷陽明,馬場純子(1994). 小学生と中学生の老人イメージ——SD法による測定と比較——. 社会老年学, **39**, 11-22.
- 大谷英子,松木光子(1995). 老人イメージと形成要因に関する調査研究(1)大学生の老人イメージと生活経験の関連. 日本看護研究学会雑誌, **18**, 4, 25-38.
- 柴田博(2002). サクセスフル・エイジングの条件. 日本老年医学会, **39**, 2, 152-154.
- 竹田恵子,太湯好子(2002). 中学生の老人イメージとその形成に関連する要因. 川崎医療福祉大学 川崎医療福祉学会誌, **12**, 1, 161-167.
- 滝川由美子,吉本知恵,横川絹恵(1999). 看護学生の高齢者イメージの変化:老年看護学概論の授業前・後の比較. 香川県立医療短期大学紀要, **1**, 51-60.